

ある中学校の取組（長期欠席予防）

経緯

入学当初より、いろいろな場面でのトラブルを理由に遅刻や欠席が目立ち、1年生の3学期に入り、連続欠席となった。両親が共働きで祖父母と過ごす時間が多く、母子分離不安が強いと小学校から引継ぎがあった。本人は対人関係を築くのが苦手なため逃避傾向が強く、家庭では要求を通すために泣いて暴れたり、家出をすることもあった。

1年生の2月から別室登校を開始し、2年生になったのをきっかけに教室復帰できたが、秋ごろ、再びトラブルを理由に欠席が重なり、2年生の1月から再度別室登校をする。別室登校では、徐々に人との接し方に変化がみられ、3年生になって教室復帰できた。

友人や教職員のサポートを受けながら、希望する高校へ進学することができた。

具体的な対応【教育相談部会】

教育相談部会で、母親のカウンセリングの継続と別室登校を勧める。支援方法を検討した結果、本人の不安が強かったため、学年の教職員が生徒とかかわる時間を確保して対応を行うことにした。

また、SCや関係機関の意見・アドバイスを受けながら、学級担任をはじめ、学年主任、教育相談部、管理職と保護者との相談を進めた。

別室登校では、他の生徒や教職員とのかかわりの中で良好な人間関係を築く体験を重ね、成長することができた。

【教育相談部会について】

生徒指導部の中にあり、生徒指導主任、学年の相談部、養護教諭で構成し、月1回部会で情報交換を行っている。欠席がちな生徒が、どのような状態にあり、どのような援助を必要としているのかを見極め、適切な働きかけを探るとともに、必要に応じて職員会議で報告し、共通理解を図っている。

【校内の体制について】

連続3日間、一ヶ月に5日以上、学期に7日以上欠席がある生徒は、不登校の初期段階・不登校状態ととらえ「欠席状況個票」を学級担任が作成する。この「欠席状況個票」は、欠席状況、学級担任の対応、本人や保護者の様子、背景等をまとめた記録として、また、学年相談部→学年主任→教育相談部→SC→教頭→学校長への報告書として活用している。

さらに、連続した欠席や、週明け・長期休業後の欠席は不登校につながりやすいので十分注意し、連続3日欠席した場合には病欠であっても（出席停止の場合は除く）、家庭訪問を行う。長期休業前後には、欠席がちな生徒への声かけや宿題の確認、補習等を実施し、欠席につながる不安要素を取り除く働きかけをしている。また、日ごろからの関係づくり、学級担任以外のかかわりや声掛けを大切にしている。